蛇の世界にとりっぷ！

freedom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蛇の世界にとりっぷ！

【Nコード】
N9864O

【作者名】
freedom

【あらすじ】
日奈久　夕花子様発祥（http://ncode.syosetu.com/n6829o/『猫の世界にとりっぷ！』）の「動物の世界にとりっぷ！」シリーズ、楽しそうだったので参加させて頂きました。　至極残念なことにシリーズの空気を読めてない、かも？　一話が短めです。　多忙により不定期更新。

マンホールをぬけると…（前書き）

「動物の世界にとりっぷ！」に参加させて頂きました。
のんびり更新ですすみません汗
どうぞ宜しくお願い致します。

マンホールをぬけると…

『拝啓　お母さま、お父さまへ

突然いなくなってしまった私に、さぞかしびっくりなさっていることだと思います。

私もお嫁に行くまでは、…いえむしろお婿さんをとって二世帯住宅を建て孫の面倒を見て貰い休日には家族揃ってお買い物をし老後の面倒も…と一人娘としての甘えと責任とで思っておりました。

でもどうやらそのささやかな夢は適いそうにありません。

なぜなら今、私がいるのはお二人のいる日本どころか地球上のどこでもない異世界にいるそうなのです。

来ることは出来ても戻ることが出来ないのだとか。

お二人に会えない寂しさに枕を濡らすこともございましたが、今はとても充実した毎日を送っております。

こちらでお友達も出来ましたので安心して下さい。

私が居なくなって寂しく思って下さっているかと思いますが、近所で評判のおしどり夫婦ですから、いつかはその寂しさも癒されると願っております。

離れて暮らす娘の為にもどうかくれぐれもお体をご自愛下さいませ。

貴方の娘、綾より』

◇◇◇

加々美綾(かがみあや)は、現在地面に向かって絶賛落下中である。

綾の眼下には、抜けるようなうすい青い色をした空と深々とした赤と緑に染まった森が地平線の果てどこまでも広がっていた。

さっきまで綾は河川敷を歩いていた。ーー筈だった。

学校からの帰宅途中に通るコンクリートで舗装をされた河川敷をすぐ下りた草むらで、その隙間を縫うように通り過ぎた白いヘビ。きれいなヘビ。思わず追いかけた瞬間、マンホールから落ちた。

「『長いトンネルをぬけると雪国だった』とは有名な小説の一節に

ありますけれど…
マンホールを落ちたら大自然だった、とは…意外でしたわ」
綾が落下しつつ独り呟いていると、ほう、と感心したように応える声があった。
声のした方へ顔を向けると、声の主らしい相手は空中だというのにまるで水の中を泳ぐようにこちらへ近付いてきた。
「…落ちているというのに面白い娘だな」
見た目の印象を裏切る、落ち着いた男の声だった。
「そうですか？ありがとうございます」
綾はニコっと笑いかけた。
「……怖くないのか？」
不思議そうな声音の相手に、
「どうしようかとは思っておりますが…」
言葉通り、綾は困ったなあと言うように小首をかしげた。
「………困っているようにも見えんが」
「いえいえ、そろそろ地面が近くなって来たので困っておりますよ？」

「…………そうか」

にこりと笑って答える綾は、男の目には困っているようには全く聞こえなかった。

「そろそろ地上がはっきり見えてきましたわね」

あ、白馬ですわと指差す先、遥か彼方にある草原を走る馬のたてがみがなびくのを美しいと褒める綾に、のんびりしている、と男はどこか呆れたような声で笑った。

地上が見えてきたどころか、緑豊かな大地が今にも二人を抱きしめんと大きく手を広げて待っていた。

○○って飛ぶんですね。

「お前は羽根でも隠しもっておるのか？」

「いえ、持っていませんわ」

「羽根も持たずそのように落ちていけば、熟れた実のように潰れてしまうだろうに」

このままいけば、綾は数分もしない内に地面に叩き付けられてぺしゃんこになるか、木に突き刺さってしまうか、どちらにしても大変残酷な結果になるのに間違いなかった。

それを分かっているのかいないのか、問いには答えず綾は微笑んだまま男に質問した。

「貴方は大丈夫なんですか？」

おかしな娘だ、と男は思った。

こうやって悠長に喋っている最中も勿論、綾も男も絶賛落下中である。

迫りくる死への恐怖でとうに失神してもおかしくないのに綾は正気の目をして笑っている。
しかし、空中にあって急速落下中のため身動きも上手く取れない綾と違い、男はすいすいと滑るように動いて、綾の周りをからかうように回れる程度には余裕があった。
「我は特別だからな。
しかしお前はこのままであれば間違いなく死ぬだろう……が、助けてやらんこともない」
高飛車な男の言葉にも、
「まあ、…それはありがとうございます」
綾は助かりますわ、とにこにこ笑って礼を言った。
おかしな娘だ。男は再度そう思った。
落人（おちゅうど）――綾のように空から突然落ちてくる異世界の人間のことをそう呼ぶ――は保護すべきモノではある。
その今まではごく稀だった落人が、最近は晴れ間に時々雨が降るような頻度で落ちてくるらしい。
上位種同士での付き合いで耳に入る話題でそれを聞いても欠片も興味を持てなかったのに、実際の落人とまみえてみれば……至極興味をそそられた。
男にしてみればそれこそとても貴重で稀なことだった。
落人とは、己の目の前にして初めて価値の分かるものなのかも知れなかった。

そんなことを男が考えている内に、もう地面は目の前だった。
男にしても、そろそろ動かないと娘と同じように地面に叩き付けられてしまうだろう。
男は、綾の身体の遥か下の大地に目をやって、下りる位置を確かめた。

ーーいつもの場所へ行くにはもう距離が遠い。

大きく根を張る巨木が斜め下辺りにある。あそこが良いだろうとアタリをつけた後に、娘を見ればじっとこちらを見ている。

男はにやり、と笑った。
この姿は落人から見れば大変に恐ろしく映るのだと聞いた。それでも動じない娘。

ーーこれから無聊をかこつ己の慰めになるかも知れぬ。

「では娘。少々手荒なことになるが生かしてやる。…目を閉じろ」

男の言葉に、綾は素直に目を閉じた。
男は大きくその口を開いた。

綾は、横腹にぶつかってきた何かの強い衝撃で、意識を失った。

きらいなものばかりで、

ひゅう、と鳴って通り過ぎた風の音。

執務室でひとり書類に目を通していた男は、屋敷の外に広がる赤と黄にへと色づき始めた森へ目をやった。

ーーもうすぐ、冬が来る。

…男は冬が嫌いだった。

凍てつき、誰しもを眠らせてしまうから。

…春も嫌いだった。

浮かれ騒ぐモノたちの気が男には騒々しくてしょうがなかったから。

…夏も嫌いだった。

炎熱のごとき暑気は男を日の下から追い出してしまうから。

…秋も嫌いだった。

冬を予感させる寒さが男に冬の訪れを否応なしに思い起こさせる

から。

ーー男は世界を、その全てを倦んでいた。

「…されど我に、世界を拒むことはできぬ」

男にはその肩からおろすことの出来ぬ責があり、それは男をおいて出来るものはいなかった。

男は遠くそびえる山々のその白い頂を、いつものように気鬱に包まれた瞳で見つめた。

◇◇◇

『かじゅちさま』

執務室と廊下を繋ぐ扉の隙間から"ちいさきもの"ーー男の一族の将来上位種となる保護されるべき幼きものが、顔をのぞかせていた。

「…なんだ」

書類に目を落としたまま男が声を掛けると、許しを得たとばかりにすりすりと這い寄ってきたちいさきものは、執務席に座る男の足元に辿り着くなり急くように口を開いた。

『かじゅちさまっ、かじゅちさっみゃっ』

焦るあまりに舌を噛んだらしい。
このちいさきものは、その中でも遅くに生まれた為にまだ"言葉"をうまく使うことができない。
ぴるぴるぴるっと舌を出し入れした後に落ち着かなげに首を振ると男を見上げた。

「……乗れ」

溜息を吐息に変えた男は、上体をかがめると手の平をちいさきものへと差し出した。

ちいさきものはその目をぱあっと輝かせると男の手の平へと身を乗り上げ、すべらかなその体をくるくると腕に巻きつかせると、その鼻頭を手の平へとつけた。

《カヅチ様、おちゅうどのひめ様が目をさましました》

「……あれには近寄るでないと申し渡した筈だが」
《カヅチ様がおそろしいものではないとおっしゃっていらしたので》
落人への好奇心と男への全幅の信頼があったから、と心を隠さぬ様子で告げられた。
この様子であれば他のものの行動も察せられるなと己の推測に嘆息した男は、ちいさきものを腕に絡ませたまま落人のところへと向かった。

男が扉を開ければ、はたしてそこにはちいさきもの達が溢れていた。
先のちいさきものが知らせに来た時点で半ば予想していたとはいえ、ちいさきもの達の純真なる好奇心に男の眉間にしわが寄る。
『かじゅちさま〜』
『かじゅちさまきたっ』
『かじゅちさま』
連れてきたちいさきものを男が身を屈め足元へおろすと、擦り寄ってきた他のちいさきもの達がずるいずるいとうらやむ声を上げた。

「此処には近寄るでないと言うたであろう」

抱き上げて欲しいと言わんばかりに男を見上げるのを、言いつけを守らなかっただろうと手を軽く振っていなしそちらへと目を向ければ。

扉から一番離れた一角にあるベッド上で、落人の娘が男――カヅチを見ていた。

きらいなものばかりで、（後書き）

どシリアスな雰囲気に癒しをぶちこんでＧｏ！………みたいな感じｄ（ｒｙ

一部修正入りました。

２０１１　１　２０

したたらずなわけは、（前書き）

二ヶ月ぶり更新。
前話参照推奨です。

したたらずなわけは、

『かじゅちさまー』

『おささまっ』

『ひー（ひめ）さまおきたっ』

『おめめっおめめっ』

『おめめあいたー』

寝台の中で既に身体を起こしていた落人（おちゅうど）の娘へとカヅチが歩を進めると、道を開けつつもちいさきもの達が舌足らずな“言葉”でさえずるようにわらわらとカヅチの足元へと群がってくる。

「お前たち、少し黙っておれ」

何やら一生懸命に報告をしようとするちいさきもの達に静かな声で諭すとカヅチは寝台の傍まで近寄り、娘を見下ろし声をかけた。

「ーー具合はどうだ」

「…ありがとうございます。
体調は頭が少しふらふらするくらいで特に問題ございませんわ」

頭を下げて礼を言った娘はまだふらつくのか頭を少し振りつつ答えた。

「そうか。…まあ命が助かったのだからそれくらいは我慢せよ。横腹への衝撃で頭が振られたのだろうが、すぐに良くなる。それ以外に痛みはないか？」

カヅチの言葉の何に反応したのか、静かにしていたちいさきもの達がまた騒ぎ出した。

『おててびしーっ』

『ひーさまびししーっ』

『おうでぃたたいっ』

「黙っておれと言うに」

そう辛抱強くちいさきもの達へ返すカヅチを見上げて、娘はどこか困り顔で恐る恐るというようにカヅチへ尋ねた。

「…先ほどから…もしかして、この子たちと…お話していらっしゃるのですか？」

何を分かり切ったことを聞く、とカヅチは眉根を寄せたが、しかしすぐに娘が異界から落ちてきた人ーー“落人”であり、上位種のこともちいさきもののことも獣人のことさえ知らないことを思い出した。

「そうだ。異種族のお前には、この者達の言葉は聞こえぬだろうが」

カヅチの種族はこの世界ーー“獣人世界”の種族の中でも、少々毛色の変わった一族だ。

大体の種族は、上位種ならば人の姿をとる“人化”をしていても同族のちいさきものの言葉が理解出来る。

しかし、カヅチの種族は元々が獣形をとっている際に発声器官を利用しての会話をする種族ではない。

そのため、上位種であるカヅチなどが人化をしている場合は、同族でもちいさきものは“発声での会話”をしないために意思疎通が難しいのだが、一種独特の“言葉”ーー共感能力によってそれを可能としている。

そもそも“共感”とは、相手の意思や気持ちを感じ取ることを言うが、カヅチの一族ではそれに加えて、自分の意志を相手に感じさせるのもその能力の内なのである。

それにも二段階あり、まだ幼いちいさきものは一段階目の、身体の一部に直接触れて己の意思を伝える“接触型共感”を先ず覚える。

そこから成長していくと二段階目として、接触していなくても人化した同族の上位種とまるで言葉を話すように意思疎通が出来る“非接触型共感”が出来るようになっていく。

元々が言葉をあまり必要とする環境に棲む種族ではなかったので、その代替として相手の意思を言葉を聞くかのように汲み取り伝える力が発達したのではないか、と言われている。

非接触型は接触型とは全く異なる感覚のために、ちいさきものが使いこなせるようになるのには苦労をようするため、習得は一語、二語から始まる。

上位種がまだ幼いちいさきものの言葉を舌足らずな言い回しに感じるのは、接触・未接触で“言葉”の習熟度に差があるからだった。

したたらずなわけは、（後書き）

世界に違和感な設定だったようなので、大元の夕花様や竜族の御紋様にご助言頂き設定変更。
…説明文も長くなった上にもしかすると前話までと違和感があるかも知れないのはそう言う訳です。筆力不足申し訳ない。
取り敢えず無い頭ふりしぼったので、世界観を崩してないと良い、な…

という希望的観測。

２０１１．２．１３
読み直したら致命的な間違いがありました…あ゛ｌ

夢ではない証拠です。

「異種族…」

「ーーお前と我らでは種が違う上に、上位種ではないからな。同族か同系種である竜族などの上位種、…ああ、上位種とはその種族の中でも人化出来る者のことだ。その連なる種族の上位種としか、ここにいるちいさきものとは意思疎通出来ぬ。
それゆえ落人たるお前はもちろんのこと、他の獣人族もこのちいさきもの達の言葉は聞こえぬし分からぬのだ。
されど、人化した者同士であれば他種族でもお前と今の我のように発声器官での会話が可能だということよ」

娘の呟きにカヅチが答えると、娘は頭痛をこらえるようにこめかみへ右手の指先を当てた。

「ジンカ、オチュウド、ジュウジンゾク……獣人族？
何より“今の”我？でも…」

考え込むように目線を落とした娘の独り言のような呟きに、カヅチが口を開きかけたが、それより先に娘が顔を上げた。

「…しつこくお聞きして申し訳ありませんが、この周りに居る子たちは…貴方と会話が出来、なお且つ喋っている、という訳ですのね？
ドッキリ、ではない、と」

娘の、その一語一語噛み締めるように繰り返された問いに、会話を直接している訳ではないがと注釈をつけつつも是と答えれば、それを聞いた娘はまぶたを伏せるように目線を落とし、自分の左手首を右の手の平で労るように擦った。

「…………痛かったので〝この現時点でのこの現状は〟夢ではない、と分かっていたのですが」

娘がすりすりと擦っている手の平の下には、いつの間についたのかまるで細い鞭か棒ででも打ち付けられたような二本の赤い痕があった。

自分が娘を運んだ時には無かった筈の左手首のそれを見咎めたカヅチが、その痕はどうした、と娘に問えば、

『おててびしーっ』

『ひーさまびしーっ』

『ゆびびびしーっ』

『いたたいっ』

それまで静かにしていた周りのちいさきもの達が、やはり意味の良く分からない言葉で騒ぎ出した。

何度目か分からないそれへ、とうとう口を開かず溜息と目線で黙らせたカヅチが再度娘に問えば、ここで目が覚めた時に夢かと思って自分で確かめてみましたの、とこちらからもやはり良く分からない応えが返る。

「これは特に問題ございませんわ。それよりも…」

「なんだ」

「もしかして、もしかしてと思っておりましたが……貴方のその声や話し方が、私を助けて下さった方にとても良く似てらっしゃる気がするのですけれど…」

「我だ」

「…姿が違う、のは」

「人化しておるからな」

「……私を助けて下さった方は、全長五メートルを越して胴の直径は三十センチ程ある方でした。
その方の外見上の種として、“本来ならばあり得ない”大きさで、私の住む地域では“神の遣い”と称される外見でしたから――あの時、確かめる必要もなく夢を見ているのだと思っていたのですけれど」

そこで娘は息を吸った。
ひた、と覚悟を決めたようにカヅチを見据え、その小さな口を開いた。

「…では貴方のもうひとつの姿は、

――アオダイショウの白蛇ですか？」

夢ではない証拠です。（後書き）

気は長いが、口を開くと簡略すぎる説明しかしない男です。

にしても、アレって涙出そうなほど痛いことがありますよね…

同じ存在の筈なのに。

「異世界ではここ“白の群れ”に棲む蛇族の名をそのように言うそうだが…
我らにそのような名はない。
蛇族は蛇族であるというだけだ」

蛇族は自分達が何に属するかを余り重要視しない。
何処の“群れ”の出身かどうか、そして何より“己が何を為すか”だ。

男のその言葉に、娘ーー綾は自分の知識にある目の前の小さな蛇たちの種のこと、自分を助けた時の男の姿を思い出した。

アオダイショウとは、人と馴染みの深い、毒を持たない蛇だ。
樹上性の傾向の高い種だが、民家の庭先や河川敷、農地周辺などの人の住む地域や平地も地中も山地も関係なく適応する順応力と高い身体能力を持つ。
体長は全長一メートルから二メートルの日本でも最大級の大きさに成長する。

ーー綾を助けた蛇はその数倍も大きかった。

瞳孔は蛇と聞いてイメージされやすい縦形ではなく丸い黒褐色で、その体皮は黄みを帯びた暗褐色から青緑色、薄い鉄（暗い深緑）色

などその色みは個体により様々であるが、総じて黄、黄緑、緑、青緑、青の系統色に属した色をしている。
幼蛇は格子状の褐色の斑紋が灰色の体皮に入っていて、瞳孔は同じく暗褐色だ。

ーー綾を助けた蛇の体皮の色は白。その瞳孔は赤。
白い体皮に赤い瞳は、稀少な突然変異のアルビノ種。
その色を持つ蛇は、白蛇ーー“神の遣い”と呼ばれている。

黙ったまま己を見つめる綾に居心地の悪さを覚えたのか、男は寝台のすぐそばにある窓の外へと視線を逸らした。

「…お前を助けたのは誰かと問われれば、我だが」
綾に向ける横顔も、後ろに無造作に流された長い髪も全て、雪のように白く。
その瞳は、綾を助けた白蛇と同じ、血の色を透かした色をしている。

けれど、己の目の前に立つ人の姿をした男の目の中には、微かに己を疎んじる気配が見てとれて綾は戸惑った。
赤色の瞳も、尊大な口調に似合う低い落ち着いた声も、あの蛇と同じだ。
けれど、今の男の目に浮かぶのは面倒事を嫌う冷ややかさだけ。
男の語りかける声は事実を淡々と述べるのみで、気遣われた筈の言葉も綾にはどこかそっけなく感じられた。

あの時、あの何もかもおかしな状況下で驚いたようにこちらを見

つめた丸い瞳や笑みを含んだ声に、面白いものを見つけたというような、むしろ自分を受け入れられたとさえ綾は感じたのに、今はもう、声と色以外に同じ存在だという印象は重ならない。
綾は思わず縋るように男へと手を伸ばした。

「“落人”はすべからく保護すべし、と上位種たる者の義務のひとつとしてあるからな」

綾の上がりかけたその小さな手は、また静かに寝台の掛布へと下ろされた後に、ぎゅっと固く握りしめられた。

しかし、逸らされたままの視線はそれに気づかなかった。

「…そうですか。
どのような理由だとしても、あの時は助けて頂きありがとうございました。
感謝いたします」

「造作もない」

寝台の上で頭を深々と下げ礼をいう綾の方へと顔を向け、男は鷹揚に頷いた。
面を上げた綾は、視線の合った男へとちいさく笑んだ。
「私は加々美綾（かがみあや）と申します。
貴方のお名前は…？」

同じ存在の筈なのに。（後書き）

この話まで通して見直したら（主に間違い修正的な意味で）エラい事になりました。　括弧が全く統一さｒ（ｒｙ

直しました…

更になおｓ（ｒｙ

ゆえにしばらくは、

「我の名は、カヅチ、だ。
この“白の群れ”の長を務めておる」
「私は貴方を何とお呼びすれば宜しいですか？」
綾がそう問えば、ちいさきもの達が一斉にカヅチへと顔を向けた。
『かじゅちさま！』
『かじゅちさまー』
『かじゅちさまっ』
「…長とでも何とでも好きに呼べば良かろう」
幾つもの自分を見つめる視線からカヅチが目を背けると、それらの視線が今度は一糸乱れずもう一方へと注がれた。
注がれた先の綾がきょとんとした顔をしてちいさきもの達を見返す。
『ひーさま、かじゅちさまっ』

『かじゅちさまーっ』

『か、かじゅ、かじゅちさま！』

綾へと言い募るように騒ぐのがカヅチの目の端にうつる。
落人には聴こえぬのに何を無駄なことを、とカヅチが少々あきれた目線でちいさきもの達を見下ろせば、綾が口を開いた。

「…ではカヅチ様、とお呼び致しますね」

「……娘、」

「私のことは綾とお呼び下さい」

「ーーお前はこのもの達の言葉は聴こえぬのだよな？」

綾の名を呼ぶ気はないカヅチと今更なその質問自体に綾は不思議そうな顔をしたが、気を取り直したように答えた。

「…？ええ。聴こえません。
それよりカヅチ様、ひとつ質問させて頂いても？」

「…なんだ」

「蛇の姿の時には人とお話が出来ないとおっしゃってましたが…
あの時ーー空から落ちているところを助けて頂いた時に会話が出来たのは何故ですか？」

蛇族や獣人族には当たり前に知られたことだが、異世界からきた落人の娘からすれば当然と言えば当然の疑問だった。

蛇族の上位種で成人後に特に能力の高い者の中には、獣形をとっていても話すように意思を伝えることが出来るようになる者もいるのだとカヅチが教えてやると、綾はそういうものなのですねと納得したような返事をしつつも微妙にあいまいな顔をして頷いた。

ちいさきもの達との意思疎通が全くままならないのに、蛇姿のカヅチとまるで実際に話しているかのようにお互いの意思が通じたからだろう。

それもその筈、カヅチの意志疎通の明瞭さは、カヅチと初めて会う他の獣人族からも一様に驚かれるほどで、蛇族でこれほどこの能力に秀でた者はいない。

「蛇族の中でも我は〝特別〟だからな。

この〝白の群れ〟の長とはそう言うものだ」

片頬を微かに歪めて笑うカヅチに、それ以上娘は深くは聞いてこなかった。

「もうひとつお聞きしても宜しいでしょうか？」

カヅチが許可すると、綾の質問は今後の処遇についてだった。

「私はこの後、…いえ、これからどうなるのでしょう」

元よりその話をしにきたカヅチは、決定事項を口にした。

「先ほども言うたが、異世界から稀に落ちてくる人間族の落人――お前のことだが、その落人が元の世界に戻れたという事実はない。

そのため何らかの職などを得て独り立ちするまでは、上位種が保

護するとりきめとなっておる。
この“白の群れ”は少々特殊な場所にある、…ゆえに暫くは我が保護することになろう」
「暫く…」
「他の獣人族かもしくは他の群れの長に声を掛けておく。…長くこの群れにおることはない」
「…こちらの群れでは、いけないのでしょうか」
「ここで落人に出来ることなどない」
否、とカヅチが重ねた言葉に、綾が異を唱えることはなかった。

ゆえにしばらくは、（後書き）

フラグクラッシャー。

ちょっと前にお気に入り１００件越え＆ユニークアクセス1万越えしてました。
それだけ読みに来て貰えてるんだなと思うととても嬉しいです。
ありがとうございます。
のんびり更新ですが、宜しくお願いします。

したがらないのに、

あれから十日が経った。
綾は客人として遇されることになり、カヅチからあの面会の後すぐに、人化――人の形を取った蛇の上位種の男をお前の世話をする者だと紹介された。
男はこの世界のことを何も知らない綾の教育係も兼ねており、獣人族のことやちいさきもののこと、蛇族特有の"群れ"のことなど、獣人世界の知識を教えられて日々の大半を過ごしていた。

「この屋敷には"群れ"の長であるカヅチ様と、まだ人型に変わることの出来ない幼い蛇たち――ちいさきものとその世話をする上位種の蛇たちだけが棲んでおり、執務に携わる者や下働きの使用人などは基本的に隣りの館か通いで勤めております」

世話人兼教育係の言葉に、綾は軽く目を見張った。
いつもは"白の群れ"のことを説明したがらないのに今日は珍しい。どういう風の吹き回しなのかと綾が思ったのが顔に出ていたのか、男は微かに右の眉尻を上げて「何か質問でも?」と尋ねた。
首を横に振った綾に、男は説明の続きをするべく口を開いた。

「"白の群れ"は長に支えられてここに在るのです」

カヅチは常に執務に忙殺されているということだった。

曰く、“群れ”の長には元々責務が多いこと。
曰く、“白の群れ”の長はその中でも特別多忙であるということ。
綾は遠回しにカヅチと顔を合わせない理由を説明されているような気がした。

忙しいからなのかそれとも違う理由からなのか、カヅチに会ったのはあの一度きりのみで客人扱いとはいえ正式な客人ではない綾をカヅチが訪ねてくることはなかった。

毎日一度、綾の部屋には女性の使用人が室内清掃に訪れる。
交流をと綾から声をかけてみたが、生真面目な態度で清掃中ですのでと断られてからは気兼ねをして挨拶と感謝の言葉のみしか話しかけられなくなった。
世話になってばかりで申し訳ないからせめて自分の寝起きしている部屋の清掃くらいは自分でさせて欲しいと世話人へ綾が訴えても、この屋敷の使用人の仕事を奪わないでくれと遠回しに言われてしまう。
そうして更に身動きが取れないようになり、綾に出来ることはただこの世界のことを知るために勉強をすることと、時折窓の外を眺めることくらいだった。

扉の向こうの廊下を誰かが通る気配や声が微かに聞こえていても、丁寧だが他人行儀な態度を崩さぬ世話人や使用人が部屋を訪れていてもーーこの屋敷の中で綾は独りだった。
世話人兼教育係の男が去り、毎日の清掃も終われば、綾は一人きりになる。
そうなればその口から出るのは段々と憂いの籠った溜息ばかりになり、出された課題も終えて更に自習をしてもそれすら一段落つい

てしまう。

秋の色の濃くなった外の景色を見ながら、綾はカヅチの言葉を思い出した。

したがらないのに、（後書き）

家！を大改稿してたら書き方混乱。

外を眺める日々を。

ーー他の獣人族かもしくは他の群れの長に声を掛けておく

…長くこの群れにおることはないーー

保護する上位種を紹介すると言われたあの日からその件についての音沙汰はない。

しかし、綾は不安を感じていた。

他の群れも獣人族も綾は知らないし分からないからだ。

現在の自分が、誰かに頼るしかない寄る辺ない身であることを綾は十分に自覚している。その不安や心もとなさは他の獣人族や群れの実態を知らぬからだと懸命にこの世界を知ることに努めたが、知れば知るほど異世界でその不安は増々大きくなった。

けれども、この群れには不思議なほど恐れを感じないのだ。

建物のせいなのか、綾は懐かしささえ覚えた。

この屋敷は綾の父方の実家である和洋折衷の古い洋館に造りや建築工法が似ている。

それを不思議に思った綾が教授されている時間に問えば、異世界からの異邦人ーー落人により持ち込まれたものはこの世界に数多くあり、この屋敷も昔に拾われた落人から得た知識の一部により建てられているのだと教えられた。

元の世界を感じさせる場所だからなのか、それとも実際に蛇たち

と交流して恐ろしいものではないと知っているからか、それともその長に助けられたからなのか。

一人の寂しさを感じてはいても落ち着いていられたし、自分を害さぬ安全な場所(ところ)だと、その根拠は薄いのに何故だか綾は確信を持っていた。

「…やっぱりこちらに置いていただけないか、お伺いにいけないかしら…でも、」

世話になっている身で、多忙だというカヅチの時間を取らせてまで訴えていいことなのか、この世界の常識も慣習も何も分からない綾には判断がつかない。
カヅチに直接会いたいと世話係兼教育係の男に言い出すことも憚られて、ただ部屋の窓から外を眺める日々を送ってもう両手の指を数えおえた。

このままでは他の群れか獣人族のところへ行くことになる。
そう焦りはするがカヅチへ訴えるのはやはり躊躇われた。
判断がつかないこともそうだったが綾が逡巡する最大の理由は、カヅチだった。

落人に、拾われた“白の群れ”のこと極力教えないという不自然さに違和感を覚えた綾が教育係の男の様子を注意深く観察し、それによりカヅチの意思が働いていることを敏感に察していた。
「カヅチ様はまるで、この“群れ”から私を追い出したいかのよう…」

知らない間に、気分を害するようなことをしてしまったのだろう

か。

綾には分からなかった。

カヅチと綾が言葉を交わしたのは助けられたときと人型で会ったあのときの二回だけだ。

けれども分からないなりに、あれから綾に会いにくることもないことや何より最後に会った時の態度で、カヅチは自分を視界にさえ入れたくないのかも知れないと綾は薄々気づいていた。

外を眺める日々を。（後書き）

ちょい重め。

被害妄想でなく、相手の気持ちが分かることってありますよね。

その優しい声に、

自分は幸運だったのだと、綾は知っていた。

異世界に落ちてすぐに拾われ助けられたのだから。

土地柄も人種も慣習も何もかも分からない、そもそも世界さえ違う場所で今も彷徨っていたかも知れないことや、何より空から地面へ向かって落ちていたことを考えれば、生きていたかどうかも分からない。

それを有り難く思いこそすれ、恨めしく思うことなど礼儀知らずも甚だしいだろうとそう思うのに、自分を助けてくれた時のカヅチと今のカヅチとの落差に綾は落胆を抑えきれない。

助けられたときのあの声音が、忘れられなかった。

――では娘。少々手荒なことになるが生かしてやる。…目を閉じろ――

これは夢だと思っていたのもあった。けれどその優しい声に疑うことなど何もなかったから、綾は素直に目を閉じた。

なのに次に目を開けてみれば、カヅチの様子はすっかり豹変していた。

――“落人”はすべからく保護すべし、と上位種たる者の義務の

ひとつとしてあるからなーー

上位種として当然すべきことだから、義務だから仕方がないと言わんばかりの台詞と声。

綾の中でなぜ、どうしてと疑問が渦巻いたが、カヅチの冷えきった態度にそれを表に出すことは出来なかった。

「あの方は私が…ご自分やこの群れに関わるのをお望みではないのね、きっと…」

“白の群れ”のことを極力教えられないことも、己に関わる群れの者がこちらを気遣う態度を微かに見せつつも余所余所しい態度を崩さないことも、そんな全ての微かな違和感をそう言うことなのだと考えれば綾の中でしっくりと辻褄が合うのだった。

「それが分かっていて、残りたいなどと…我が侭は言えないわ」

綾はこの群れで何か仕事や役に立てることを見つけたいと足掻いていたが、それを諦めることをとうとう決心した。

父方の祖父に良く言い聞かされていた言葉を思い出す。

ーー人は人の分(ぶ)で出来ることしか出来ぬもの。

それを真摯に為すことを努め続けて初めて道が拓けるものなのだよーー

「保護して下さる先がどのようなところだとしても…出来ることをするしかありませんわ」

綾は気持ちを切り替えようと、この世界の歴史の載った書物を手に取った。
しかし今日に限って綾の気分はそうそう浮上はしないようで書物の文字を視線が上滑りしていくだけで少しも頭に入ってこない。
祖父母から貰った腕時計を見れば思ったよりも時間が経っていない。
綾の口からはため息が零れた。自分の集中出来ない理由は分かっている。
懸念事項であった先々のことに気持ちの上で踏ん切りがついたことによって、毎日無理矢理押し込めていた思いが顔を出した。

「…っ馬鹿ね、考えてもしようのないことよ」

心臓からせり上がってくる何かを息を詰めて消そうとする。けれども、消えない。

「……っ、嫌よ」

考えたくない。そう思ってももう遅い。
綾は胸元をぎゅっと皺になるほど握りしめた。

この屋敷での自分の立ち位置もカヅチのこともこれから先のことも、思えば確かに綾の心は乱れる。
けれど何より綾の胸を張り裂けそうに辛く痛ませるのは、大事な家族や友人たちともう二度と会えないという現実だった。

その優しい声に、（後書き）

綾が諦めました。…当たり前ですね。

そして珍しく連投。

綾を掘り下げたら、自分の予定していた以上に恋愛要素が強くなりそうです、が…もの凄く困っていますハハハハ…

ぎゅっととじて。

「お母様…お父様…」

ぽとり。睫毛から伝った水滴が、床へと落ちた。
異世界から落ちてきた者が元の世界へ帰れたことはない、そうカヅチは言っていた。

綾が必死に閉じ込めている望郷の思いは、いつでもそれをあざ笑うかのように不意をついてその扉を開こうとする。
二度と帰れない世界に残してきた大事なものを奔流のように思い出し、綾の瞳からはもう枯れ果てたはずの涙が後から途切れず溢れだしてくる。
頬を伝う二筋が顎へと到達する寸前、綾は肌が傷むのも構わず両の手の平でぐいと拭うと両頬を押さえ目をぎゅっと閉じて、それ以上の涙を堪えた。息が苦しい。けれどそのまま奥歯を噛み締める。

「…昼間は、泣かないと決めた筈ですわ」

夜、どうせ寝台の上で散々に想うのだ。
あちらに残してきた全てのもののことを。
涙はその時に流せばいい。
昼間も泣き暮らすなんて建設的でないことこの上ないと、綾は自分を叱咤した。

「部屋に籠っていると鬱々としたことしか考えませんわね…」

目を開いた綾の視界にうつった窓の外は晴天だった。
もう既に秋めいて薄い色をした空は高く澄み、山間の隙間の高台にあるらしいこの屋敷の外には、この世界に落ちてきたあの日よりも更に緑から赤と黄色へ染まりつつある見事な木々が葉を揺らして綾を誘っている。

勝手をしては、と綾はずっと遠慮をしていたが部屋を出てはいけないとは誰にも言われてはいない。辞書や書物を広げていた机を片付け、厚めのストールを肩に羽織った綾は、気分転換にと廊下へと繋がる扉をそっと開いた。

◇◇◇

決済書類に押印をしたカヅチは、先ほどから一向に減る様子のない目の前の書類と資料の山に目をやって、吐きかけた溜息を喉奥で押し殺そうとしたが失敗した。
盛大な溜息となって出た呼気は長く、どうやら自分は苛々しているようだ、とカヅチは自己分析しつつ眉根を寄せる。
カヅチが群れを離れたのはせいぜい五日程だったが、秋に入る多忙な時期に重なったのもあり、戻ってから十日間働き通しでもずれにずれ込み、未だにこれだけの仕事が山積している。

しかし、それはここ数年においては比較的良くある光景だ。今更それくらいで苛々することなどないのにおかしなことだと、普段とは違う自分自身にカヅチは物思いにふけりそうになったが、今の己に自身の内心探索に興味を取られている暇などない。

カヅチは頭を一振りすると思考を隅へと追いやって次の書類へと手を伸ばした。

それから暫くして、それでも山を少しずつ減らしある程度終わりの目処が立ち、一休みをカヅチが入れようとした所に、扉を軽く叩く音と共に扉の向こう側から入室の許可を請う声が届いた。

ぎゅっととじて。（後書き）

その扉を叩いたのは。

連投。

…続くといいなあ。

いまだいたらず。

カヅチが応と返すと、開いた扉からカヅチの側近の一人が身体を滑り込ませた。

「失礼致します」

そして空けたばかりの机上の空間は、新たに届いた書類とそれに付随する資料の束で再度占領されることとなった。

「長様、こちらとこちらと…こちらは急を要するものですので、今ご決済をお願い致します」

「…そうか」

返事に一呼吸置いた後、それでも書類のひとつにすぐさま目を通しはじめたカヅチに、片付けられた書類の山へ視線をちらりと流した年若い側近は申し訳無さそうに目を伏せた。

「我らが不甲斐ないばかりに、長様にはご負担をお掛けして申し訳ございませぬ」

「分かっておる。…お前たちが謝ることではあるまいよ」

カヅチは確かに書類の山には少々うんざりしていたが、数年前と

違い今は自身を含め、動かせる駒が少ないのだ。
そしてそれは自分や過去の側近たちのある意味怠慢の結果とも言えるもので、今傍にいる者たちに非や責があることではないというのがカヅチの長としての認識だった。
「いいえ！我らももっと早くそのための教えを請うべきだったのです…」
「…それを嘆き悔やんでどうする？今更取り戻せぬ。
その暇があるならば、手と頭を動かせ。そうしてひとつでも多く得て、今と先の我を助けよ」
そう静かに告げる。
言いながらも手を止めずにいたカヅチは早急だという一つめに決済の印を押し指示を出して、またひとつ書類を手に取った。
側近はそれでも力の足りぬ己を不甲斐なく思い唇を噛み締めたが、しかし長の言う通りである。自分たちに出来ることが少ないなら、一分一秒でも早く多くのことを得て長の役に立てるよう努力するべきなのだ。
出された指示を頭に叩き込み、必要事項は書類へと書き込む。そうして無事決済を経た早急の書類を全て抱えた側近は、深く一礼して退出した。

元々この“白の群れ”は、カヅチを頂点とした絶対君主制とでも言うべき体制で動かされている。
群れに関する全ては長であるカヅチの決済を経てから運営される為、掛かる負担は元からして大きい。

しかし、数年前まではそれを支えられるだけの老練な古参の側近たちがカヅチの周囲を固めていたので、膨大な書類もその殆どが決済に上がって来る頃には報告書の目通しだけで後は押印すれば良い状態で届いていた。

だが寄る年波には勝てなかったのか、その側近たちがまるで雪崩を打つかのように次々と病いや老いで引退し、まだ教育途中であったその部下たちが繰り上がって代替わりしたが、古参の者に比べれば及ぶべくもない。

見識や経験は、ひたすら重ねて得ていくしかないものだ。

未だ若輩と言ってもいい今の側近たちではそれらが狭く浅いために、長の決断が必要な案件か長への報告と決済のみで良いかの判断にも不安が残る。

そのためカヅチが認めるまでは決済書類は全て資料その他を揃えての提出となった。

そうして数年、みな側近に選ばれるほど優秀で勤勉であるとはいえ書類を全て任せるにはいまだ至らず、カヅチが留守にすれば書類の山が形成されるという訳であった。

「だがまあ、辛抱も後もう少しよの…」

気を利かせたのだろう側近からの指示であの後すぐに給仕が煎れにきた茶を啜りながら、カヅチはひとりごちた。

いまだいたらず。（後書き）

“白の群れ”の事情。

昨日上げるつもりが寝落ちした上に、投稿半日後に説明不足を追記&改稿しましたｏｒｚ

甘く爽やかな。

部屋から出た綾を迎えたのは、初秋のひんやりとした空気だった。外に出なかった十日の間に随分と季節はすすんだようだと、綾は暖かく快適に保たれていた客間の空気に慣れた身体を微かに震わせ、肩を抱きしめる。

「でも、頭がすっきりしますわ」

鬱々とした思考が、キンと冷えた空気に払われていく。

等間隔に並ぶ明かり取りの小窓や、露台(テラス)へと繋がる嵌め硝子の格子扉から見える景色は、綾の居室から見える整えられた庭園とは違い鬱蒼と生い茂る森ばかりだ。

随分と様子が違うものだと思いつつ、磨き抜かれた木目のうつくしい内廊下をゆっくりと歩く。

屋敷は随分と大きなものらしい。この階だけでも部屋数はざっと見て十はある。

この建物の様式とどこか似ている綾の祖父宅も、一般的に見れば随分と大きなものだが、それとは比べるのも烏滸がましいほどだった。

絵画や彫刻が寂しくならない絶妙な間隔で配されていることに綾

は感嘆の思いを抱きつつそれらを眺めながらしばらく歩を進めていると、いつの間にか突き当たりに行き着いた。
突き当たりの扉を開ければ上下階を繋げるゆるい螺旋状の階段があり、綾がそれを下っていくと屋敷の大きさに見合わぬ小さな扉の目の前に出た。
握りの使い込まれた把手と敷かれた土落としの様子を見れば普段は使用人たちが使っているのだろう。どうやら外へ繋がっているらしいその片開きの小さな扉の把手を回してみれば、鍵はかかっていなかった。
綾は改めて把手を握りしめると外へと押し開いた。

扉を開けると屋敷の裏側に出たが、そこは使用人たちの作業場なのだろう、大人の足で十数歩分ほどの広さのその均されたむき出しの地面には、綾の目には何をするものなのかは分からなかったが作業途中らしい道具や洗濯台が置かれている。
しかし今は休憩時間なのか、人も蛇も誰もおらず閑散としている。
綾は屋敷を背にして広場の向こうを見ると呟いた。

「空気が違うとは思いましたけれど」

屋敷があるのは何処かの山中だった。
あの空から落ちた時の自然の分布図を思い出せば、さもありなんである。
屋敷裏の広場すぐに雄大な山が聳え立ち、その丈高い木々が小さな広場を越えて四階建の屋敷を飲込むが如く、まるで覆い被さるようにせり出して屋根へと陰を作っている。
山の嶺は高く、厚く垂れ込めた雲海に隠されて天頂を窺い知ることは出来なかった。

「…あら？」

風に乗って微かに甘く爽やかな香りがする。匂いの元を目線で辿れば、広場の端に山へと繋がる細い道が見えた。

人や獣が通って出来上がったらしいそれは、歩道というよりは獣道との表現の方が妥当そうだ。足場は悪そうだったが横幅はあり、スカートでも十分登れそうだった。

広場を横切ると、綾は山道へと足を踏み出した。

山を登りはじめてすぐ、木々の様子に違和感を感じて綾は立ち止まった。

それが何かと考えようとしたその時、背後からがさりと草を掻き分ける音がして咄嗟に振り返ったが、小さな動物でも通ったらしく何も見当たらない。

ほっと息を吐いた綾は、頭を振り払うと何かに追われるように上へ登りはじめた。

段々と急勾配になっていく上に道幅も狭まっているようで度々服の端を枝に引っ掛けそうになりながら、足場の良くない道のりを足元を一つ一つ確かめて登る。

そうして暫く行くと、甘い香りが強くなってきた。それにもうすぐだと励まされて、足を前へ前へと動かしていると突然に目の前の空間がひらけた。

甘く爽やかな。（後書き）

その香りの元は。

…それにしても季節をまるきり無視投稿ですね。
冬に終わらせる筈だったからなあ…

でもここからちょこっと連投出来る、

かも知れない。

不思議なほど、

坂道を登り切った先は、盆地のように平らな場所だった。
そこには果樹らしい木が何本も生えていた。香りの元はこの木に生る果実だったらしい。野生の群生地なのか、乱雑に生え枝をしならせるほどたわわに実らせている。
綾が近づいてみれば、小さいけれどもそれは確かに林檎だった。

「良い匂い」

甘い香りを胸いっぱいまで吸い込む。
そうする内に綾は、ふと喉の乾きを覚えた。乾燥した空気と歩き通しだったためだろう。
木を見上げればすぐ真上に食べてくれと言わんばかりに実が生っている。

「一つ、頂きます」

綾は実をもいで上着の袖でごしごしと拭った。そしてそのまま皮ごと齧ればしゃくりと小気味よい音を立てる。

「…やっぱり甘くありませんわね」

綾の想像した通りに味が薄く甘さも殆どなかった。誰に管理され

ている訳でもないのか、一つの木に実が生りすぎているからだ。
それでも十分喉を潤すことは出来るので、芯のみを残してありがたく完食する。残った芯は少し土地の空いた場所に埋めた。
人心地ついた綾が真上を見れば、綾の目の前には太くて大きな枝振りの林檎の木がある。

「誰もいませんわよ、ね…」

分かってはいたが、それでももう一度周囲を見渡して人目がないのを確認すると、綾は手頃な枝を掴み勢いをつけて幹を蹴り上げた。

「絶景ですわ」

元の世界の果樹園と比較すればここの林檎の木は随分と背が高い。最初はもっと根元に近い枝にするつもりだったが、綾はついつい自分を支えられるだろうギリギリの高さまで登ってきてしまっていた。
ほぼ天辺の枝に片腕を巻き付けているから、枝に腰掛けても顔が枝葉から出ているために景色はよく見えた。
林檎園の盆地を覆う木々の隙間から、空と森の色合いを楽しむ。
そうして落ち着いて景色を良く見れば、悪路の足元ばかりを見ていて気づかなかった、山を登りはじめた最初に感じた違和感の正体に綾はようやく気づいた。

「…ああ、気づかなかったのが不思議なほどですわね」

この山の濃く深く密集した木々の幹は元の世界で見慣れた太さで

はない。
大の大人が何人も手を繋げてやっと一回りするような、樹齢千年と言われ崇められている神社の神木と同じほどの巨木ばかりだった。
それと分かって眺めれば、これほど壮観なものもそうはない。
綾は驚嘆と、それから微かに持っていた期待を打ち砕かれたことへの失望を混ぜ合わせた複雑なため息をついた後、くしゃり顔を歪めた。
「…日本にこのような場所はもう、ありませんもの…」
子供の頃に綾は日本の巨木の特集を組んだドキュメンタリーを見たことがあった。
日本各地で人の手や調査が入っていない土地は皆無に等しく、これほど広大な巨木の群生地など、もう遥か昔に消滅している。
海外なら？一瞬あがくようにそう考えてみた。
しかし、それらは現実的でないことを知っていた。
地球ではないと確信を持って感じているのを、綾は自分で知っていた。
ーーけれども、今この瞬間まで、決定的な事実を目の当たりにはしていなかったのだ。

不思議なほど、（後書き）

綾の心情。

景色はこんな場所があるなら見てみたいなあ。

そして一日一投で連投第二弾。
でも出掛ける予定なのでいつも自分が上げてそうな時間帯に予約投稿してみます。
無事投稿出来ると良いんですが…

おろかなこと。

世話係兼教育係の男に書物を目の前に並べられた時、文字がほぼ日本語であることに綾は驚愕した。

今までカヅチ達と話していた言葉もずっとそうだったと、その時に今更ながら気づいた綾は、そこで一縷の望みを持ってしまった。

もしかすると、まだ自分は日本に居るのではないかと。

ここは日本の奥地なのではないか。獣人族といわれても綾はまだ誰かが変化するところを一度も見たことがない。ちいさきものの声も聞いたことがない。最初の白蛇は本当は夢だったのではないか。皆で自分を騙しているのではないか。

愚かなことに、そんなことを考えたのだ。

だから、目を背けた。

攫われてきたならば当然あるべき施錠や見張りが全くついていないこと。

祖父母に持たされたＧＰＳ発信機能付きの腕時計が壊れた様子もないのに電波が全く立たないこと。

教えられる獣人世界の歴史の整合性の高さも、それらを記す沢山の書物の年代を重ねた古さにも、その他の異世界である事実を示す全てから、目を瞑ろうとした。

滑稽なことだ。この屋敷の者は皆、人の姿をしていても蛇なのだから誰かに目の前で蛇になってくれないかと頼みこめば真実はすぐに明らかになることだった。

体皮の模様が見てみたいとでも言って世話係の男に頼めば良かったのだ。

けれど、綾は頼まなかった。頼めなかった。

カヅチたちの言葉が真実だと分かっていたからだ。

それを目にする勇気は先送りにしていた。絶対などと思い知りたくなかった。

でも分かっていることから目を逸らすことも出来なかった。

だから、異世界で生きていくことに不安を持ち、懸命に歴史を学び、交流を持とうとし、二度と会えぬ者たちへの思いに涙が零れた。

己の思考回路の矛盾は自身が一番良く分かっていた。…それでも、もしかしたらと。

「本当に愚かですわ…」

それを今、決定的に覆せない事実を自ら見つけてしまった。自分でその細いよすがを壊してしまった。

上がってきた道の方角へと目をやれば、赤や黄色の枝葉の合間から屋敷や隣りの館の屋根が見えた。そこから更に山裾へは急勾配な崖となっていて平地は随分と遠くにある。

綾は後ろを振り返った。

自分のいる林檎園の更に先、尾根を辿って天頂までを見上げれば、雲海で見えずとも天を突くように切り立った山のその山間にいるの

だと分かる。
眼下に見える“群れ”の建物以外に人の手や文明を感じさせるものは何も見えない。
まだ初秋の筈なのに、人の温もりのない場所は綾にひと際寒さを感じさせる。
綾は肩に羽織ったストールを首もとまで引き上げて巻き直すと顔を埋めた。
「…こんな場所は、日本どころか、きっと世界中どこを探してもありませんわ…」
屋敷を追い越してもまだ余裕のある丈高い巨木の群生するその隙間、半ば埋もれるようにして“白の群れ”はひっそりと存在していた。

おろかなこと。（後書き）

人は矛盾した思いを抱えているもの。
…だと思います。それが受け入れがたいことならば尚更。

一日一投で連投第三弾。
おおお頑張ってる…！！（気のせい）
…そしてちょいちょい前の方を修正してたり…汗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9864o/

蛇の世界にとりっぷ！

2011年5月31日14時38分発行